

心理学の観点から 現代の幼児教育を考える



黒田実郎

一 二十世紀前半の心理学と幼児教育

最近アメリカで出版されたワトソン R・I とリンドグレン H・C の共著「児童心理学」(Psychology of the Child) の第一章に、今世紀の児童研究に貢献した五名の重要な心理学者、教育学者の写真が掲載されている。彼らを出生順に並べると次の通りである。

- ホール (G. Stanley Hall, 1846—1924)
- フロイト (Sigmund Freud, 1856—1939)
- ビネー (Alfred Binet, 1857—1911)
- モンテソーリ (Maria Montessori, 1870—1952)
- ワトソン (John Broadus Watson, 1878—1958)

心理学になじみのある読者には、これらの学者についてのべる必要はないが、一般の読者のために簡単に説明しておこう。

ホールは質問紙法などの客観的方法を児童研究に導入した心理学者で、「児童研究の先駆者」と呼ばれている。晩年には米國クラーク大学学長になり、多くの有名な心理学者を養成した。幼児教育面においては、彼はその当時、アメリカ幼児教育界を支配していたフレーベル主義を痛烈に批判し、遂には崩壊にいたらしめる原動力となった。これについては「幼稚園の歴史」(津守真ほか 厚生閣) に詳しくのべられている。後に、アメリカ自由保育の実際面における指導者になったヒル (Hill, Patty Smith) とブライアン (Bryan, A.) も、ホールからいささかしい感化を受け、また心理学において成熟理論を唱えたゲゼル・A・もホー

ルの門下生であった。

フロイト・S・は、周知の通り、オーストリアの精神医で精神分析学の創始者である。彼の学説は、発表当初、ヨーロッパでは受け入れられず、ホールによってアメリカに招待されて後に急速に発展した。精神分析学は必ずしも幼児教育学と直接的な関連はないが、乳幼児の母子関係が、人格の発達にとって重要であることを強調するため、子どもの情緒面の指導において役立っている。フロイトの死後、娘のアンナは精神分析学を治療教育面で活用するため、ロンドン北部にある彼女の住居の近くにナーズリー・スクールと児童クリニックを併設し、児童心理療法専門家を養成している。筆者は在英中、約一年間にわたって、彼女のナーズリー・スクールで開かれるセミナーに毎週出席したが、精神分析学は彼女の努力によって、幼児教育と直接的なつながりをもつようになつてきている。

フランスのビネーは一九〇五年に、今日の知能テストの原型であるビネー・シモン・テストを考案した。知能を精神年齢(MA)で表わしたのはビネーの功績であるが、知能指数(IQ)で表わすテストを最初に考案したのは、アメリカの心理学者ターマンであった。彼が考案したスタンフォード・ビネー・テストはアメリカ、および英連邦諸国で広く用いられ、わが国の鈴木ビネー、田

中ビネーなどもスタンフォード・ビネーを参考にして作られたテストである。ビネーに始まる諸種の心理テストのおかげで、幼児の能力の客観的評価が容易になり、心理学が幼児教育と、よりいっそう密接な関連をもつようになった。なお、スタンフォード・ビネー・テストの考案者ターマンも、クラーク大学におけるホールの門下生であった。

モンテッソーリは今世紀初頭に、ローマの下層地区の知能遅滞児に、教具を用いた感覚教育を行うことによつて知能を向上させ、一躍世界の教育者の注目をあびるようになった。一九一三年に彼女はアメリカに招かれたが、その直後からモンテッソーリ保育は一部のアメリカの幼稚園で取り入れられ、一九一六年にはその数が二百園に達した。しかし、間もなく台頭したデュイイ、キルバトリックらの進歩的教育(Progressive education)や、ホール、キャッテルらの機能主義(Functionalism)心理学によつて、その人気は急速に下降し、一九二〇年頃には全く衰退した。最近、モンテッソーリ教育は再評価され、世界各地で復活したが、その一つのきっかけとなつたのは、一九五七年のスパートニック・ショック(注・ソビエトの人工衛星打ち上げによつて、アメリカ国民が受けた衝撃で、それ以後、早期の知的教育に対する世論の関心が高まつた)である。わが国では大正三年(一九一四年)に、

モンテッソーリの訳書「教育の原理及実際」が出版され、一時、モンテッソーリ教育は注目されたが、アメリカの場合と同様に、間もなく衰退し、最近になって再び注目されるようになった。このように、日本の幼児教育は、アメリカの幼児教育の動向によって、かなり左右される面がある。

ワトソンは心理学から主観的方法や内省法を排除し、客観的方法のみによって研究することを主張したアメリカの心理学者で、その学説は行動主義 (Behaviorism) と名づけられている。彼の心理学説は、その後エール大学のハルによって発展させられ、学習理論 (Learning theory) という名で現代心理学において重要な位置を占めるようになった。近年アメリカで開発されたティーチング・マシンやトーキング・タイプライターなどは、学習理論を応用した学習促進のための教具である。学習理論は学習効果などの認知面だけではなく、最近では幼児や成人の行動障害の治療のためにも、その原理が活用されている。

二 現代心理学と幼児教育

アメリカの児童心理学書にその写真が掲載された世界的に有名な五名の学者を中心にして、心理学と幼児教育の関係をのべてきたが、これらの学者はすべて故人であった。彼らの理論と方法

は、現在、いかなる学者によって引きつがれ、幼児教育にどのような影響を及ぼしているのである。

この節では前節とは逆に、ワトソンの行動主義心理学から派生した学習理論から取り上げよう。

学習理論が現代心理学において果たしている役割は非常に大きい。特に、客観的方法と数量化を好むアメリカの若手の心理学者には人気があるので、今後の幼児教育はしだいにその影響を受けるであろう。前述のトーキング・タイプライターなどの教具も、この学派の心理学者の影響を示す一例である。しかし現在までのところ、わが国では、この分野の心理学者で幼児教育に関心をもつものは非常にまれである。欧米では、学習理論が障害児の治療教育でも活用され始めている。学習理論にもとづく治療法は「行動療法」という名称で知られているが、イギリスではアイゼンク、ラックマン、アメリカではウオルピが中心的な働きをしている。また学習理論の立場からの、養育態度、しつけ、性格形成などの研究者としては、アメリカのシアーズが有名である。

モンテッソーリの理論と方法を心理学的側面から強力に支援しているのは、イリノイ大学の心理学者ハントである。彼の著書は邦訳されていないために、わが国では専門家だけにしか知られていない。しかし、彼の名著「知能と経験」(Intelligence and Ex-

partence, 1961) は、アメリカではブルーナーの「教育の過程」と同様に、知的早期教育の理論的支柱となっている。

ビネーによって始められた幼児の知能に関する研究は、スイスのピアジェとアメリカのブルーナーの出現によって、さらに推進された。しかし、これらの学者の認知理論は、内容的にかなり異なっている。ビネーは知能を量的な面から捉えたが、ピアジェは知能を質的に吟味した。ピアジェは必ずしも知的早期教育を支持していないが、ピアジェ理論から示唆を受けたブルーナーは、知的早期教育の無限の可能性を信じている。このように、立場はそれぞれ異なっているが、認知心理学に二名の強力な心理学者が出現したことによって、現在の幼児教育はその影響をかなり受け、知的早期教育化の傾向を示し始めている。

情緒的発達を重視する精神分析学は、イギリスのアンナ・フロイトらの努力によって、幼児の治療教育に応用されつつあるが、情緒障害児が漸増している現状を考えると、その重要性は今後さらに増大するであろう。したがって、現在の保育六領域のほか、治療教育学や臨床心理学の知識は、これからの保育者にとって不可欠の条件である。障害児の治療法にはいろいろあるが、中でも精神分析理論にもとづく心理療法の知識は現場の保育者にも必要である。一方、乳児保育の面では、スピッツやボウルビィら

の精神分析的理論が、世界的に最も多くの支持者を得ている。

最後に、ホルルの系統をひく心理学理論と幼児教育との関係について簡単にのべよう。彼の門下生であったゲゼルの死後、成熟理論はやや沈滞気味である。成熟理論によって心理学的な裏づけをされていいアメリカの自由保育が、かつてほどの勢いをもたないのは、ひょっとするとゲゼルに匹敵する成熟説の唱導者のいないことが、その一因であるかもしれない。

二十世紀後半に入ってから、レディネスを早めることの可能性を実証しようとする研究がしだいに増加している。それは、スプートニク・ショック以後における世界的な早期教育重視の傾向と、進学競争激化による時代精神の変化が、研究の動向に反映されたためだと考えられる。

幼児の教育は、政治的圧力や社会情勢の変化によって左右されるはならない。いろいろな条件におかれた子どもをありのままに観察し、その結果を追跡して、そこから得られた結論によってのみ、幼児教育のあり方が決められるべきである。現代は、幼児の心理学にとっても、まさに混迷の時代だといえる。

(聖和女子大学)